



1

手伝いもほとんどしたことが無かったという伸明さんですが、独学で農業を始め、自然に近い形で野菜を作りたいと、農業、化学肥料を使わない「自然循環農法」を取り入れ野菜作りを実践。始めはうまくいかず失敗もありましたが、現在はベビリーフなど欧米などでよく使われる野菜を中心に、約40種類もの野菜を栽培し、広島2、神奈川1、福岡1の計4店舗にも販売しています。

「店も農場も共に順調で、自



2

分のやりたいことができている理由をこう続けます。「いろんな人に助けていただいたて今があると思っています。西城という地元で農業ができていことも大きいです。昔から知っている方が近くにいらっしやいますし、田んぼを借りていておじいちゃんもとても親切で皆さん声をかけてくださいます。ハウスも管理だけしてくれれば使ってもいいよと貸してくださる方もいて、本当にありがたいですね。」

昨年春、新たな挑戦として3枚ある田んぼの1つをブドウ畑にしました。10アールに苗木220本を定植。今後徐々に面積を増やしていく計画です。将来の夢は、自分で作っ

たブドウでワインを作ること。「ゆくゆくは醸造して自分の店を出せれば」と思い描きます。そのために必要なこととして環境の整備を挙げる伸明さん。「高野りんごなど、庄原にはおいしい果樹があるので、せっかくあるこれらの素材をうまく利用して、庄原の酒という分野が広がれば面白いと思います。庄原市がどぶろく特区に続きワイン特区になれば、農業者の可能性が広がります。今農業を目指す若い子が増えています。庄原には農地がありますし、醸造所ができれば雇用も生まれ、そういった動きがあれば若者が庄原にもっと目を向けるはず。」

こうした思いを持つのは、庄原市の魅力と可能性を感じているからこそ。「現状では難しいことでも、行動を起こしていけばいい方向に変わっていくと思えます。そのためにも、自分のやりたいことをやり続け、失敗を恐れず常にチャレンジしていきたい。」

今の暮らしに手ごたえを感じながら充実した表情で語る伸明さん。庄原市で送れる新たなライフスタイルとして、今後も注目です。



栗栖伸明さん (西城町)

プロフィール
1978年生まれ。西城商業高校(現西城紫水高校)卒業後、広島市内のコンピューター専門学校で学ぶ。ファームステイ先のカナダで農業の魅力と出会い、帰国後農業の道に進むと決意。趣味のスノーボードで知り合った真理子さんと結婚し、平成22年に「ごはんばー旬の畑食堂」、翌23年に「ワインパーク 堺町バル」をオープン。平成24年には、地元西城町で「あちゅらむオーガニックファーム」を始め、自然農法による野菜づくりに取り組んでいる。先月第2子が誕生。真理子さんと子どもの4人で西城に暮らす。

自分の好きなことを楽しめる場所
庄原暮らしには魅力と可能性がある

1 2 伸明さんの店「ごはんばー旬の畑食堂」。店の運営は信頼を置くスタッフにほとんどを任せている。3 燻製カキと旬野菜のアヒージョ。香ばしい豚肩ロースのローストリンゴの焦がしバターソース。比和産りんごのソースが肉の旨みを引き立てる。



3



4



特集 選ばれる庄原市へ

移住・定住を考える



「田舎なんてダサイ」「何も無くてつまらない」——そう言うって都会へ出て行った人は多くいます。ところが今、「自然の中で暮らしたい」「田舎ってカッコいい」——そんな思いを持つ若者たちが増えていきます。そして、都会から田舎へ移住する人が実際に増えてきています。これは人口減に悩む庄原市にとって、人を呼び込むチャンスです。しかし、多くの自治体、地域があるなかで、どうしたら庄原市を選び住んでもらえるのでしょうか。庄原市に移住してきた人を見ると、ヒントが見えてきそうです。今月は、移住・定住について考えてみたいと思います。

庄原流里山スタイル

広島市中区土橋町にある「ごはんばー旬の畑食堂」。文字通り旬の食材にこだわった創作料理を提供しています。店内は落ち着いた雰囲気、ゆったりとした時間と空間を提供し、隠れ家的なお店として好評です。

この店の特徴は、何と言っても庄原産の食材を使った料理が食べられること。メニューには庄原産の文字が並びます。「自分が好きなことをやっているだけなんです。こう表現するのは、オーナーの栗栖伸

明さん。西城町出身の伸明さんは5年前、妻の真理子さんと共にこの店を開業しました。食材へのこだわりから3年前に西城町へ帰郷し、実家の田畑で野菜作りに取り組み始めました。週末になると、収穫した農産物を自ら店舗に持ち込みます。農産物は店を任せ

ている腕利きのスタッフが調理し、それを伸明さんがテーブルに運びます。「おいしいと言われるとやっぱりうれしいですね。」
兼業農家の実家で米作りの

古民家への誘い

憧れの古民家に出会う

大分県出身の別所洋子さんは、結婚を機に岩手県栗石市で33年間暮らしていましたが、2年前から古民家を探していました。

「息子が鳥取の大学出身ということもあり第1希望は鳥取県内でしたが、姉が高宮に住んでいるので、そこから近い三次と庄原を次の候補として探していました。」

自然が好きという洋子さん。



古民家は自然を感じます
昔の暮らしを楽しみたいです



老後は自然の香りがする古民家に住みたいと思っています。昨年春に庄原と三次の物件を10カ所見て回りました。その中から、比較的条件の良かった三次市の古民家に二度決め、10月から入居しましたが、日当たりの悪さと湿気の多さに悩んでいたと言います。

「そのとき、たまたま見た庄原市のホームページにこの物件が出ていたんです。すぐに市役所へ連絡しました。」

早速、現地を見て驚きました。イメージしていた以上の古民家で、ほとんど手が加わっておらず、家の状態も良好でした。「あまりにも立派な建物で、自分が住むには少々荷が重いと感じ、最初は断ったんです」と洋子さん。ところが、洋子さん以上にこの家に魅力を感じたのは息子のリンさんでした。

「今まで見てきた物件はほとんど廃墟のような家か、い

じり過ぎていたところばかり。それに比べてこの家は、ほぼ手付かずで、ここしかないと感じました。」

改めてこの物件に決めた二人。仲介業者に入ってもらったことで、購入手続きも円滑に進み、入居までの期間に傷みがある箇所の補修をお願いしました。「多少傷みがあるところは自然の素材を使って補修し、できるだけ昔の家に戻りたいと考えていました。お願いした佐伯建設さんは、同じ思いを持った業者の方だったので安心していきます。」

リンさんは東城町内の仕事も決まり、現在3月10日の入居に向けて々と準備を進めています。

「今はワクワクと不安が半分

東城町内堀に移住を決めた別所 洋子さん (62) 前列右
リンさん (28) 後列右

仲介した有限会社佐伯建設 田口 治美さん 前列左
佐伯 真史さん 後列左



半分。まずはここでの暮らしを落ち着かせて、少しずつ築しめたらと思っています。なるべく家に手を加えずに、不便なことも楽しめていけたらいいです。東城には桜がきれいな場所があり、遊覧船にも乗れるので、地域のことをもっと知って、できるだけ早く友人たちをこの家に呼びたいですね。」

移住希望者の声を聞く

田舎に住みたい人が増えています。
どれくらい、どんな相談があるのでしょうか。

増えている定住相談件数

以前から、定年を迎える世代を中心に「田舎暮らしがしたい」「自然の中で過ごしたい」という声はありましたが、「い」という声はありました。ここ数年、若者の田園回帰志向が高まっています。リーマンショックや東日本大震災などを契機に、自分の生き方を見つめ直す人が増えたことが大きいと考えられます。

内閣府の調査によると、都市住民が農山漁村地域に定住したい願望が、平成17年と平成26年を比べて、30代が17.0%から32.7%へ、40代では15.9%から35.0%に上昇

移住希望者の傾向

よくある相談には、「家庭菜園をやりたい」「購入・改修

などの初期費用が少なく済む安い物件がほしい」といったものがあります。こうした希望がかなえば仕事にはこだわらないという男性相談者がほとんどです。20代〜30代の若い世代になるほど自然志向の割合が高く、自然豊かで環境が良いところで子育てがしたいという子育て世帯の相談も増えています。「農業法人から独立するのに農地がほしい」「宿泊施設を建てて庄原に人を呼び込みたい」といった以前にはなかった相談も増え、田舎に新たな価値を見出す人が増えていると感じられます。

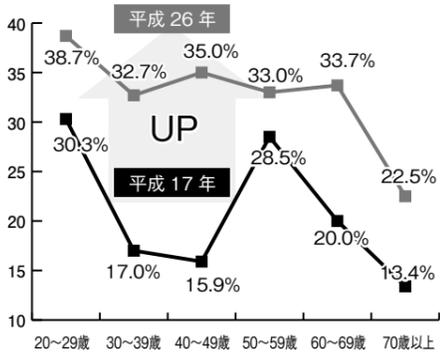
東京から移住した庄原市地域おこし協力隊員 高林直樹さん (本村町)



岩国の実家から東京に帰る際に中国山地経由で帰りました。そのとき庄原市に立ち寄ったのですが、岩国の実家と比べ、なんと広々としたところだろうと印象に残りました。その印象がずっと残っていて、庄原市でぜひ暮らしたいという思いが今につながっています。私のように移住を希望する人は多くいらっしゃると思いますので、相談を受けながら庄原市の魅力を伝えていきます。

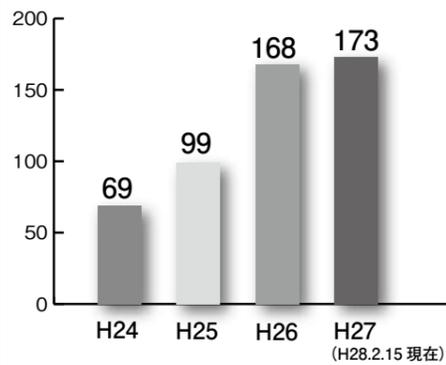
都市住民の農山漁村への定住願望

(ある・どちらかというかと答えた人の割合)



資料)内閣府「都市と農山漁村の共生・対流に関する世論調査(2005年11月)」、
「農山漁村に関する世論調査(2014年6月)」より国土交通省作成

庄原市の年度別定住相談件数



東京都千代田区有楽町で開催された「ひろしま定住フェアin東京」で、定住相談を受ける高林さん。



口和自治振興区 地域マネージャー
つみやまみちひろ
積山道弘さん

「くちわの家」は、所有者の方の維持管理が良く、改修箇所が少なく済みました。しっかりとした造りで、雰囲気も良く利用者の方にも喜んでもらえると思っています。



ちょっとした移住を体験してください

市の助成で古民家を改修
7年前から空き家対策に取り組んでいる口和自治振興区では、空き家となった木造2階建ての古民家を所有者から借り受け、お試し体験施設「くちわの家」を整備しました。この施設は、庄原市へ移住を希望する人に利用してもらい、短期間庄原市での生活を体験してもらうことで、移住へのきっかけにしようとしています。本年度、市が新設した生活体験施設整備事業補助金を活用して、約160万円かけて台所やトイレを改修し、冷蔵庫などの家電も備え付けました。ほとんどの家財がそろっているの

**庄原暮らし
お試し体験施設「くちわの家」**



- 所在 庄原市口和町大月107番地6
- 構造 木造2階建瓦葺 (1階：151.58㎡、2階：65.79㎡)
- 利用期間 1週間以上3カ月以内
- 利用料 1週間1万6千円。1週間を超える場合、1日当たり2,200円を上限に加算。

問い合わせ
口和自治振興区 ☎0824-87-2213
<http://kuchiwajichi.com>

すぐに生活することができず。畑も付いているので野菜作りや収穫作業などもできます。1月22日にはオープンセレモニーが行われ、利用者の募集を開始。1家族、1週間以上3カ月以内で利用ができます。「自分たちで空き家を改修し、何かに活用できないかと常々考えていました」。そう語るのは、口和自治振興区地域マネージャーの積山道弘さん。同振興区では、定住の取り組みとして空き家の活用を模索してきました。今回の取り組みは、その一歩。「くちわの家」で田舎暮らし体験をしていただくことで、この地に少しでも愛着をもっていたら

と想っています。そこから移住へとつながっていくと期待を寄せています。ただ、PR不足の面から、現在問い合わせは1件のみ。今後はSNSなどを活用したインターネットでの情報発信に力を入れていきます。「環境は整ったので、あとは利用いただくことが次のステップになります。手探りではありますが、体験メニューなども設定しながら移住希望者のニーズも把握していければと考えています。ご相談いただければ、できる限りサポートします。身近に庄原市へ移住を希望する方がいらっしやれば、ぜひご紹介ください」。

庄原市空き家バンク制度



空き家を登録するには、物件の面積などの情報や、田畑などの付帯物件の情報、所有権の確認などが必要になります。また、空き家バンクを利用するには、利用者登録が必要です。

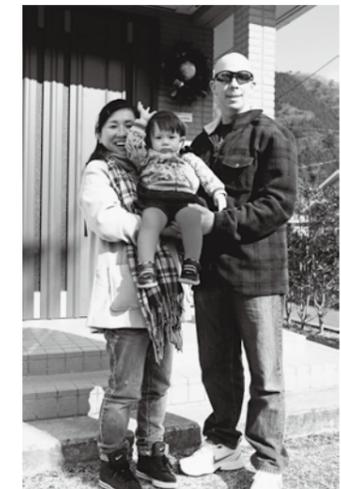
移住希望者を呼び込む

移住を希望する人を呼び込もうと、市は帰郷定住を呼びかける仕組みや空き家バンク、補助制度などを設けて定住対策に取り組んでいます。その一端をご紹介します。

**「帰ろうや倶楽部」が
移住を後押し**

アメリカノースカロライナ州出身のヘンダーソン・マークさんと庄原市出身の千尋さん夫妻は、アメリカ軍の兵士だったマークさんの退役を機に、日本への移住、庄原市へ帰郷したいと考えていました。その際に役立ったのが、庄原市が個人会員へ向けて定住に関する情報を発信する「帰ろうや倶楽部」。昨年2月に入会し、市の担当者からアドバイスをもらいながら、古民家を中心に空き家を探しました。

**移住へのきっかけ
背中を押してくれたのが
帰ろうや倶楽部でした**



アメリカから総領町に移住したヘンダーソン・マークさん(39)と千尋さん(39)の結核菜ちゃん(1)

「市役所ではいろいろと相談に乗っていただき、親身に対応していただきました。空き家バンクにも登録させてもらいましたし、市営住宅にも応募しました。その結果、現在の市営住宅に住むことになりましたが、地域の方からはいつも声をかけていただき、野菜が多く出来たからと言ってわざわざ持ってきてくださるなど、本当に良くしていただいています」。庄原市に移住して改めて田舎の良さを感じている千尋さん

「マークさんも「ここでの生活はいいことばかり」と笑顔を見せます。これからの目標は古民家に移り住むこと。「娘が小学校に上がるまでには古民家に住みたいですね。この子が大きくなったときに庄原に住んでよかったです」と思ってくれるように育てたい」と将来への思いを巡らせるお二人。これからの庄原暮らしに期待を寄せています。



**「帰ろうや倶楽部」
入会受け付け中!**

帰ろうや倶楽部とは、市外で暮らす本市出身者や庄原市へ移住を希望する若者、またはその家族に、庄原での就職や住まいといった定住に必要な情報やふるさと情報を送り、帰郷定住の呼びかけを行う仕組みです。

●個人会員
市外で暮らしているが、いずれは本市に帰郷したい方、帰ってきてもらいたいと希望するご家族の方が入会できます。郵送またはメールで定期的に情報をお届けします。

●応援事業所・団体会員
趣旨に賛同する市内企業や自治振興区、市民団体などが入会できます。求人情報・ふるさと情報・活動PRなどを提供ください。個人会員へ情報を提供するほか、会員紹介を市のホームページに掲載します。

問い合わせ
自治定住課定住推進係
☎0824・73・1257

課題に迫る

— 庄原市の空き家事情 —

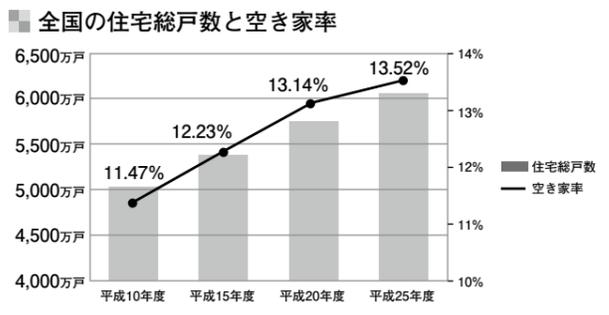
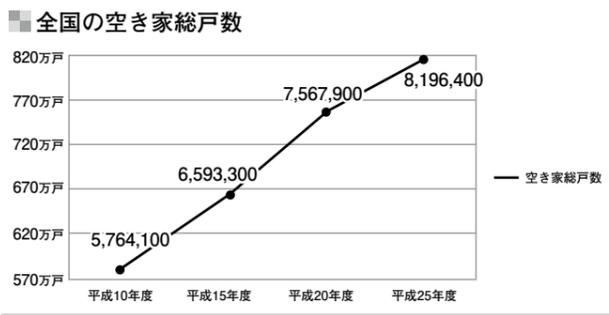
全国で空き家が増加

空家の増加は、もはや社会問題になっています。平成25年住宅・土地統計調査によると、全国の空き家総戸数は約820万戸。空き家率は13.52%と10軒に1軒以上は空き家となっています。

一方、庄原市を見てみると、住宅総数は1万5330戸で、そのうち空き家は約3330戸、空き家率は約18%に上り、5軒中1軒近くが空き家という状況です。「隣は空き家」という状況が今後さらに増えていくと予想されています。

進まない空き家バンク登録

多くの自治体がこうした空き家の対策として、定住対策ともなる空き家バンクを設け、移住希望者に情報提供すること



簡単ではない空き家の課題

なぜ空き家バンクへの登録が少ないのか。その理由は大きく分けて3つあります。

1 つ目は、空き家を手放したくないという人が多いこと。住む人がいなくなっても、益や正月には帰省するという人が多く、帰る場所が無くなるという思いがあります。実家で暮らした思い出が奪われてしま

うという思いも登録をためらう理由につながっています。

2 つ目は手続きの問題です。通常、家や土地などの不動産は専門業者でなければ扱えませんが、空き家で一定の条件に当てはまるものに限り、自治体が空き家バンクという形で紹介できます。

しかしながら、家や土地の売買にかかる手続きには専門性が求められ、例えば登記の関係や相続の問題もからむので、売主と買主の当事者だけでは話が進んでいかなない場合があり、そういった煩わしさが登録を妨げる要因にもなっています。

ヘンダーソンさんもその点について、「実は古民家がいい話になりかけていた物件がありました。改修工事も依頼していたんですが、直前になって家主さんの登記がされていないことが分かり、結局話がまとまりませんでした。交渉から契約までを当人同士で行なわなければならず、お互いに気も使うしすごく負担感がありました。プロの方に仲介していただければ、もっとスムーズにいくのでは」と指摘し

ます。

3 つ目は、空き家の状態が悪いというものが。家が朽ちていくのが早く、雨漏りなどで傷み具合は増します。程度が良ければ買手もありませんが、あまりにも状態が悪いものは売り物として扱えません。そうした空き家が

増えている事実があります。別所さんに物件を紹介した自治体定住課の今村俊洋主任事は「ご紹介した建物は所有者の方の管理が良く、空き家バンクに登録された物件の中でもあれほど状態の良いものはありませんでした。すぐに購入されたのもこの点が決め手でした」と話します。

空き家は、単に人が住まなくなると寂しいというだけではありません。防犯面や環境面で問題となっているところが全国にも多くあります。所有者個人の問題という見方もありますが、だからと言ってこのまま放つて置くと、地域にとつて大きな損失を生んでしまいます。

時代の変化とともに価値観も変わる それをいかに地域が受け入れられるか

移住希望者が空き家を求める一方で、受け入れ側の課題が見えてきています。その課題によって、庄原で暮らしたい人を逃してしまうかもしれません。

こうした課題をどう解消していけばいいのか、※リノベーション、※DIYといった古民家の再生と田舎暮らしを楽しむことを実践・提案している Shobara Ijyu-Lab(シヨウバラ イジユウ ラボ)代表の水間真さんに聞きました。

今

、欧米式のリノベーションやDIYに興味が持つ若者が増えています。古民家をコツコツと自分色に染めながら、田舎暮らしを楽しむという新しいライフスタイルが注目されています。

こうした古民家の購入希望者が増える一方で、課題が見えてきました。私も空き家となった古民家を購入し、リノベーションを進めています。市内で見つけた空き家のほとんどが市の空き家バンクに登録されていないものばかりでした。そうした物件は測量をしてないものが多く、登記がきちんとされていないものがほとんど

そのため、購入したくても手続きに時間と労力がかかってしまいます。それ以前に空き家の情報を得ようにも情報源が無く、私自身、空き家を自力で探し出すしかなかったので大変でした。

こうした整理を所有者の方がしてくださっているだけで、購入する側は負担が減り、話も進みやすくなると思います。そうすれば空き家バンクにも登録でき、購入希望者に情報が届くと思います。

定住の考え方も昔とは変わってきています。同じところに住み続ける人もいれば、都市と田舎と2つの家を持ち、週末だけ田舎で農業したり、自然の暮らしを楽しんだりという人もいます。数年で住む場所を変え、仕事も1つの定職に就くのではなく、複数の職を掛け持ちしながら順次暮

らし方を変えていく新たなライフスタイルも今後増えてくると思います。田舎志向が高まるなか、移住が増えていくためには固定観念にとらわれず、そうした新しい価値観を受け入れる柔軟さが求められてきます。厳しい言い方ですが、こうした変化に対応できなければ地域は生き残っていきません。そのため、行政ができること、民間だからできることを一緒に考えて、協働していくことが大切だと思います。



※リノベーション…古い建物の良さを生かしながら、給排水・電気・ガスの配管なども全面的に刷新し、新築時以上に性能を向上させたり、好みのデザインや間取りに変えたりすることで、「新たな付加価値」を生み出す手法。 ※DIY…日曜大工のこと。

問い合わせ Shobara Ijyu-Lab
メール m.320makoto@gmail.com
facebookページ Shobara Ijyu-Lab

取材を終えて

「自然が素晴らしい」「自分の好きなことができる」「子どものアレルギーがびたりと治まった」「都会のストレスがなくなり体調が良くなった」「何より人がいい」。

このように取材したほとんどの方が庄原に移住して良かったと答えてくれました。そして生き生きと庄原暮らしを楽しんでいる、そんな印象を受けました。

楽しいところには自然に人が集まってくるもの。今回ご紹介した皆さんのように、ここに暮らす私たち自身もつと暮らしを楽しむことが、さらに人を呼び込む鍵になると思います。そのためにも、受け入れる側の環境整備が求められています。

空き家問題一つを見ても、定住対策は簡単ではありません。行政、事業者、団体、地域、住民がいかに協働できるか。選ばれる庄原市になるために、粘り強く取り組んでいきたいと思います。